

百首正解

天



老子經古義

三冊 九審伯慎著

四冊

庭訓往來

半紙本
平假名附錄

一冊

冊

老子經古義 三冊 九審伯慎著 四冊
老子經古義清淨虛無ヲ以テキタル者ニテ大書タ濟世三約

切人書ト云コトヲ解タルモノナリ五千言悉ク其意ヲ以テ

片假名ニテ分リヤスヤクニ注歌ス雲々千方ノ单見ト云シ

四書

明朝板

大字新板

十冊

序歌

はーへ子 談正大人著

二冊

附錄花月一夜論辨

花月一夜論辨

二冊

此書ハ日本記古事記万葉集ノ歌ノ中ヨリ上代中近古ノ片歌アリ并能譜發句連歌等ノ片歌アリノ委シアラハシ且外言語半詠半音カハカニ等古例アリダ和文ノ書カタ古例等アモ微細ニレルス歌學通俳必用ノ書ナリ

古今諺

明 揚升庵著

一冊

六經ヨリ諸子百家史書三至ルヲ古今書籍叢載所

諺語

アソニ卷ノ出接人書名ノ配入

一冊

唐及第詩選

一冊

立華正道集

前書日用重宝一卷ノ多クアラム

冊

御家流庭訓往來

大字

二冊

本朝年代考記

一冊

同

立華正道集

二冊

料理献立部類集

魚類

二冊

同 劍形秘傳抄

名料理也丁口上云

三冊

世ニ料理ノ書多シトイモ献立ノミニテ庖丁切形ノ秘傳抄

シニサヌ故ニ益モ此書ハ庖丁切形ノ秘傳抄也島ノシカガ

三十六解ノ秘傳其外献立故實料理ノ秘密等圖タフ

以テ秘ク記ス庖丁家ニ置テ口用入益アル書ナリ

五冊



東方子
本草綱目
卷之三
目錄

絶えずて零るをさう

はがくははま

一ノ

のぞむる

おもひ

や

わきて

こひとく

か

高松前守相公祐卿

此と同様

御手り
大和多々人の御よりあひの伯をも天坂和伯
人間の伯をも度をもかくは黙草
本多のものとてのやうの伯をもござるが
おとづれの伯のたゞにあらざるよし
おとづれの伯のたゞにあらざるよし
おとづれの伯のたゞにあらざるよし
能のいわゆる人をもかくはや運の伯を能傳ふ
能のいわゆる人をもかくはや運の伯を能傳ふ
能のいわゆる人をもかくはや運の伯を能傳ふ
能のいわゆる人をもかくはや運の伯を能傳ふ
能のいわゆる人をもかくはや運の伯を能傳ふ
能のいわゆる人をもかくはや運の伯を能傳ふ

詩傳テキストの文也一端のやう御呈の伯翁
翁オキヤドレを伯子號コキフを伯呼コキフあるもの
を伯學オキガクを御オモテますと御オモテておもひ
まのとわづかオモテかか御オモテて候オモテ
御オモテを御オモテて候オモテと候オモテと候オモテと
伯オキを知オモテりて白オホの國コザケのやうとひと
月アマツを仰オモテて力オモテのを知オモテる所オモテのを知オモテ
人ヒトをめ業オモテて徳オモテを知オモテる所オモテのを知オモテ
画オモテと仰オモテて都伎オモテと二三の伯オキを知オモテる所オモテのを知オモテ
のを知オモテりてはあらハナ二言の伯オキを知オモテる所オモテのを知オモテ

人ヒトのをもとつてゐてさうして思ひ
もんあくわくわくせくあくまぐわくわく
げけ学オモテよ都伎オモテと二三の伯オキを知オモテる所オモテのを知オモテ
のを知オモテりてはあらハナ二言の伯オキを知オモテる所オモテのを知オモテ
かとくわくむけ百萬オモテを集オモテてひとを考オモテまげ壁オモテ
れいとくわくかうとくはあゆうての室オモテを設オモテせり
経オモテをかくとくはあゆうての室オモテを設オモテせり
御オモテを解オモテとくはあゆうての室オモテを設オモテせり
一語オモテを達オモテしゆくともじゆくとくとくとくとくとくとくとく

こちくはおとづれのいとむかしの
ヒトコト

おとづれのいとむかしのいとむかしの
水精はまゐるをよみがふつてたまひやせす
あまうておとづれの風をよせんまほのまのす
まくらひはめをひきの風をよせんまほのまのす
おとづれの風をよせんまほの風をよせんまほのす
まくらひはめをひきの風をよせんまほの風をよせんまほのす

神代学

杉庵志道

天知日天皇

かのゆめすけはまくらひをす

我らのれども、やうにゆく

歌あらわす

約篇

後撰集社

カリホ乃ち、カリホス、カリホスと活用
初テ行を刈テ初テ乾テ、行を刈テ乾テ後小余
をり、行を刈テ、行を刈テ、行を刈テ、行を刈テ

トマアフキトマアフキトマアフキトマアフキ

トマアフキ

がとも自他に、いとむかしのいとむかしの
がとも自他に、いとむかしのいとむかしの

大御父舒明天	皇也御姓中	大兄亦葛城ト	申奉ル迎江大	津ニ都ス	秋	アキハ天氣也	天地氣ハ和ヲ	貴トス故ニ萬	物ノ實ノ時ヲ	田	タハ玉也種也	水入宰テ給テ	種ヲ置所ノ名	也故ニ水有ナ	曰田水	火ナ宰ル日	知神ハ
--------	-------	--------	--------	------	---	--------	--------	--------	--------	---	--------	--------	--------	--------	-----	-------	-----

故ニ文字を大ヲ

加テ作神

島

ハタケ云ケハ

五穀ノ灵ニ故

ニ作物在時ノ

名ニ毎時ニハ

云々

庵ハ水穂傳云

苦トバ

本語トバシトハ

興ニ巴革ニ則

葉名ニテ興革ノ

也

後世ノ説此哥
天皇ノ御製ニ
班時代ノ風氣
ニ違フト云テ
萬葉ヲ引出テ
秋田跡カリホ
衣牛寒リ露オ
キニケルト云
哥ノナマレル
ヒナト云ハ哥
人ノ説此哥
ノコトヲ知ス
似タル哥アハ
タル哥古今珍
カラ古今集

うのびいわのみをうるる耳に漏らば
うぢ。やの國と前後する山々のまれて
居てもめぐれ常とある傷十ガラ材の用を考
えども傷のうちにひきりて皆昔の木根とあは
ぬまがねまあるのがラ材をもれど考
核を経ててはるか昔の材の用を考
れかのうじてねどあるぬうに十ガラ材の用を考
えども乾あら木立木の内もあらゆるくあれ
くふせんの体たる細くあらゆるくあれ
其事とあらゆるくあれ

秋ノヨノ月ノ光

レキヨナレバリヲ

フノ山モユエスヘテ

ナリ六佑ニ秋ノヨ

箱根ノ山ノウチサ

ノ月ノ光レ清ケベ

ソテル此外似タル

奇カバヘガタシ

ヨリミハ吾

天智天武天

大御又ハ天智

天皇也天武天

皇后也天武天

崩レ玉ヒテ後

四年正月即位

在近江ノ大和國

ヨリ大和國

藤原ニ遷玉フ

持統天白王

け百首のうちよあらわしあらはすよりよあら
はあらと本音くらうらべ一巻之一中大兄三山歌
一首天智高山波雲根火雄男志等耳梨典相
諱競伎神代從如此爾右良之古昔日田然爾有
許曾虛蟬毛鳩半相拾良思伎反奇高興
耳梨山典相之時立見爾来之伊奈美國波良之
てけみの山の古事記傳くらうけふる大和國守
馬の足のとくも双てふ中より香久山の女らもたなま
うり耳梨ひの里かひと耳梨ひの香久山三十あ
轍ちくらうめをめがたうめがたうめがたうめがた
双てたてまをみけとのよらう女田の御もとと神代
えりゆれれりゆれれりゆれれりゆれれりゆれ
津うる孫ふる都と遷へ給へて後けこのじと唐
賢キアリして大歸又天智天白王の所詮覺どと思

雲根山男山也
故ニ男松ヲ生

出立せ候て後乃へはあ同巻に春過而

夏末良え白妙能衣乾右天香久山もと生の

ナツキタルラシ ミロタヘノコロモカワケリマヲカノヤマ

ハルスギテ夏末ルラシトモ御代のいづる年と耳根
毛と耳根毛とをもりふやキ名ルラシトモルラシウ

アリムキタリトモシテ御毛水毛也

反り毛と毛とをもりぬくが妙毛枕

毛と衣おレタリトモシテアリのひと言やうけらを毛と

ヌミの枝毛けらをゆがすと毎日と首よせてゆれ

ヌキヌキとけらをゆがすと毎日と首よせてゆれ

雲根火山耳梨山也トモシテウチヒヤマウ

瓦アシミナレヤマの又マヨイアマナノホナアマの書

香久山也
故ニ女松ヲ生

久山也トモシテアメの香久山也傳人

あらんと能くかめ人の徳をうも詠ふ一首の

クモ。シテアラム神也トモサ田のあらんと
鳴石也トモシテアラム年も年もて数年もと
アラム

アラムとモシテアラムの鳴石也トモシテア
ラムとモシテアラムの鳴石也トモシテアラム

アラムとモシテアラムの鳴石也トモシテアラム

アラムとモシテアラムの鳴石也トモシテアラム
アラムとモシテアラムの鳴石也トモシテアラム

アラムとモシテアラムの鳴石也トモシテアラム
アラムとモシテアラムの鳴石也トモシテアラム

耳梨山男山也
故ニ男松ヲ生

爲家卿後撰抄

ニ云香久山ニ

夏ノ日神樂ヲ

奏シテ惟子ヲ

スラシテ火ニ

乾スニ過アル

人ノ惟子ハ否

乾過十キ人ノ否

惟子ハカワタ

記レタリノ

衣ハ神代ノ例也

濡

千載集ニ
建仁三年霜月
二十三日俊成
卿九十歳ノ賀
イヲ和哥所ニ才
先尾

夙ノ寄トテメ
サレ侍ル
十攝政
春カスミシ
ニ衣ヲ折ハヘ
テ幾世ホスラ
ン天ノ香久山
アリ然バ定家
郷ノコロママ
ハ香久山ニ衣
アヨホスシノ
ト例ノ明ノテ
也

すらりとてる事にゆきわゆり
新古今集夏
ケラシトテラシのよりうをとまよケリトテ
けらし前よりとめくあらひテラシトイフもと
約モテフモテ名乾ト謂ウあらヒ一首のゆく
三のゆく神代ノ濡れとしゆふゆかむをとの
中まづまづとある事のを惟子を濡
すらりとてる事にゆきわゆり
新古今集夏
ケラシトテラシのよりうをとまよケリトテ
けらし前よりとめくあらひテラシトイフもと
約モテフモテ名乾ト謂ウあらヒ一首のゆく
三のゆく神代ノ濡れとしゆふゆかむをとの
中まづまづとある事のを惟子を濡

萬葉畧解ノ境

ニ古事記ノ哥
ニ比サ也多能山

阿保能迦臭山
トアレバ茲モ

アメ乃香久山
トヨムヘシトサ

云ハ謂シ比サ也
方ト挽詞ヲ置

時ハ麻ヲ采ニ通
ト云亦挽詞ヲ置

云時ハ阿麻ヲ
置スシテ阿采ニ

通ハシテ阿采ニ
ト云亦挽詞ヲ置

云時ハ阿麻ヲ
置スシテ阿采ニ

通ハシテ阿采ニ
ト云亦挽詞ヲ置

云時ハ阿麻ヲ
置スシテ阿采ニ

云時ハ阿麻ヲ
置スシテ阿采ニ

其例
本語苗ニ代
テ云時ナハ

本語齡ニ金ト
与テ云時スガ

本語凡シ車ト
与テ云時カザ

車云
右ノ如語ト語

ヲ与トキト不
与時ト一樣ニ

牟用ニ從フ委
ニ云

をも大御およみや御へまや天皇の御もと

がくもくびだるの思もノ思多モハシ支の多

夫子の達もの達もも深むるもかくは天皇

の傳もさきを傳も根も枝も極ひ御降御跡

脚も足もくも深て櫻も人のもとゆふ一見の奇

密易き傳も根も枝も人のもとゆふ一見の奇

たるまちの根も枝も御氏がまくも一見の奇

漢も根も枝も一見の奇

の根も枝も一見の奇

の根も枝も一見の奇

の根も枝も一見の奇

の根も枝も一見の奇

の根も枝も一見の奇

の根も枝も一見の奇

の根も枝も一見の奇

仰きまくらの仕事書の事あつて

寝かしむるの心うつすはづくらの事

寝かしむるの心うつすはづくらの事

寝かしむるの心うつすはづくらの事

寝かしむるの心うつすはづくらの事

寝かしむるの心うつすはづくらの事

寝かしむるの心うつすはづくらの事

寝かしむるの心うつすはづくらの事

柿本人麻呂

姓氏不詳石見
国ノ產シ萬葉
卷ニ柿本人麻呂
別妻來時ノ

萬葉集

寄物陳思

アレヒキ枕詞ありシグリヲミ水鈴尾シタツリ尾テ冰ヒタル

モカタマスガススガ

ある尾テカタマスガススガ

アレヒキ枕詞ありシグリヲミ水鈴尾シタツリ尾テ冰ヒタル

モカタマスガススガ

ある尾テカタマスガススガ

ヨウヨウトウ十ガナガシヨム上のせもとみをぬきを

く下クサマサマト夜ヨウヨウトテ夜ヨウヨウトテ

助アシテテ助アシテテ

ひヒおオよヨあアすスあアすス。

尾テモカタマスガススガ

或況ニ柿本人麻呂
ハ天押帶日子
命ノ後十六氏
ノ別ナルヘシ
トハ臆度ノ況

ちくく如くももくと宵をも獨處す

ヨヒ レヒトリス

己う尾のセミが長々寄り尾をもくへだてぬ是

アダギ。アラモトアサトの事ふもあくせ

アサトの事ふもあくせ

萬葉巻ハ長日木ノ哥
上畧足日木ノ哥
山鳥ユソハ尾
向ニ嬢トヒス
ト云ヰ蟬ノ人
十アル吾ヤ如何
ニスト一日一夜
モハナレ居テナゲ
キ恵フラムエモ
ヘバ下畧

いづれ五十連ワ行のウタモリハウロコの反ヲ
あくまの形別△賀足^{カタ}ノ^{カタ}山^{カタ}ノ^{カタ}
カタ^{カタ}の形別△賀足^{カタ}ノ^{カタ}山^{カタ}ノ^{カタ}
ホ阿行のウタモリウロコの反才ありカタ^{カタ}の形別
△賀足^{カタ}ノ^{カタ}字^{カタ}ウト^{カタ}尾^{カタ}ノ^{カタ}合^{カタ}才^{カタ}
あくまウタモリ^{カタ}ノ^{カタ}尾^{カタ}ノ^{カタ}合^{カタ}才^{カタ}
双^{カタ}ノ^{カタ}形^{カタ}△賀足^{カタ}ノ^{カタ}男^{カタ}女^{カタ}の
モ田^{カタ}ノ^{カタ}女^{カタ}ノ^{カタ}有^{カタ}ノ^{カタ}女^{カタ}ノ^{カタ}有^{カタ}の
アカタノカタノカタノカタノカタノカタノカタノカタノ

此山ノ形陽成
境ノ海奇ノ可見
ニ合テ可見

山部赤人

上總國山部郡
之產也
真測ノ說ニ末
日目二山部小指ト云
人武天宿祿ト十三年
玉フコトアリ可ヨ
其氏ナルシ故ニ班田
シノ下司ナビニ便
ノ哥ナルヘ皆推
十ドニハ哥ヲ
寧ノ僻事ノ後半
カ都リ亞ム人ハ總
モトニ

新古今集ニ百弓の駿河の
田畠の浦の後、萬石あはれをあれ
えもへて赤人の富士とゆく安房の
田畠の浦と譲り去り續紀曰養老二
年五月割上總國平群安房朝夷長坂四郡置安
房國云赤人の頃、國セバシのとある
人けびにひそむより赤人の家がある。
もの日の赤いとおりあるよせざる
もじもじむじむじむじむじむじむじ
初安房のゆきは四郡

思フハ恩ナリ
田舎ノ人ニモ
古今不更名ヲ
十ス程ノ人多
都ニ来モノ也
柿本ナドモ同
此赤人モ上總
国ヨリ都ニ出
ト見ユ

と徳國を北とす
右ノ子を赤城とす
長坂取羽夷在て代の
ち一西の浦とす平群郡安房郡在て浦とす
三里或ニ三里とす而西と相模伊豆と國とて
毛と赤と帶とすとすとすとすとすとすとすとす
國放げてつる山とすとすとすとすとすとすとす
あつ浦とすサキの浦とすとすとすとすとすとす
あく凡四十里をとす間空よほとすとすとすとす
とすとすとすとすとすとすとすとすとすとすとす
とすとすとすとすとすとすとすとすとすとすとす
名とすとすとすとすとすとすとすとすとすとす

聖護院道興准

后

回国難記

安房国

清澄寺ニテ

アカツキノタレドキ

星モキヨスミノウチ

バラ遠クノボル山力

ナ

天津

昔見レ雲ノカヨヒ

チキトチベヲトゾ

姿今モ見マシヲ

前原

前バラノ里ノウシロ

山オロシ舟ニモミヂ

ニシキツナリ

磯邑

ウニキカクイソヅタ

ヘ行イヌムラニムラム

ラ見ユル海士ノツ舟

ハラ

野嵩サキ

アマヲ舟見エツカク

レツアサ明ノ野ジテ

カサキノキリノムラ

ムラ

穂トシムモ田児浦トシス所のモトリモリ自

知ム人ト御モ田児浦トシス駿ムアモミモ

セモツアモ御モアモツ御モアモツ既ニ聖護院道

案内モアモツアモツアモツアモツアモツアモツ

アモツアモツアモツアモツアモツアモツアモツア

那古寺

ナゴノ海ノキリノタエ

マニナガムレバココモ

ユフ日ヲ洗フ白ナミ

禰未人望富士歌一首尾短哥天地之分時徳神

伏備而高貴寸駿何有布士高嶺辛天原振

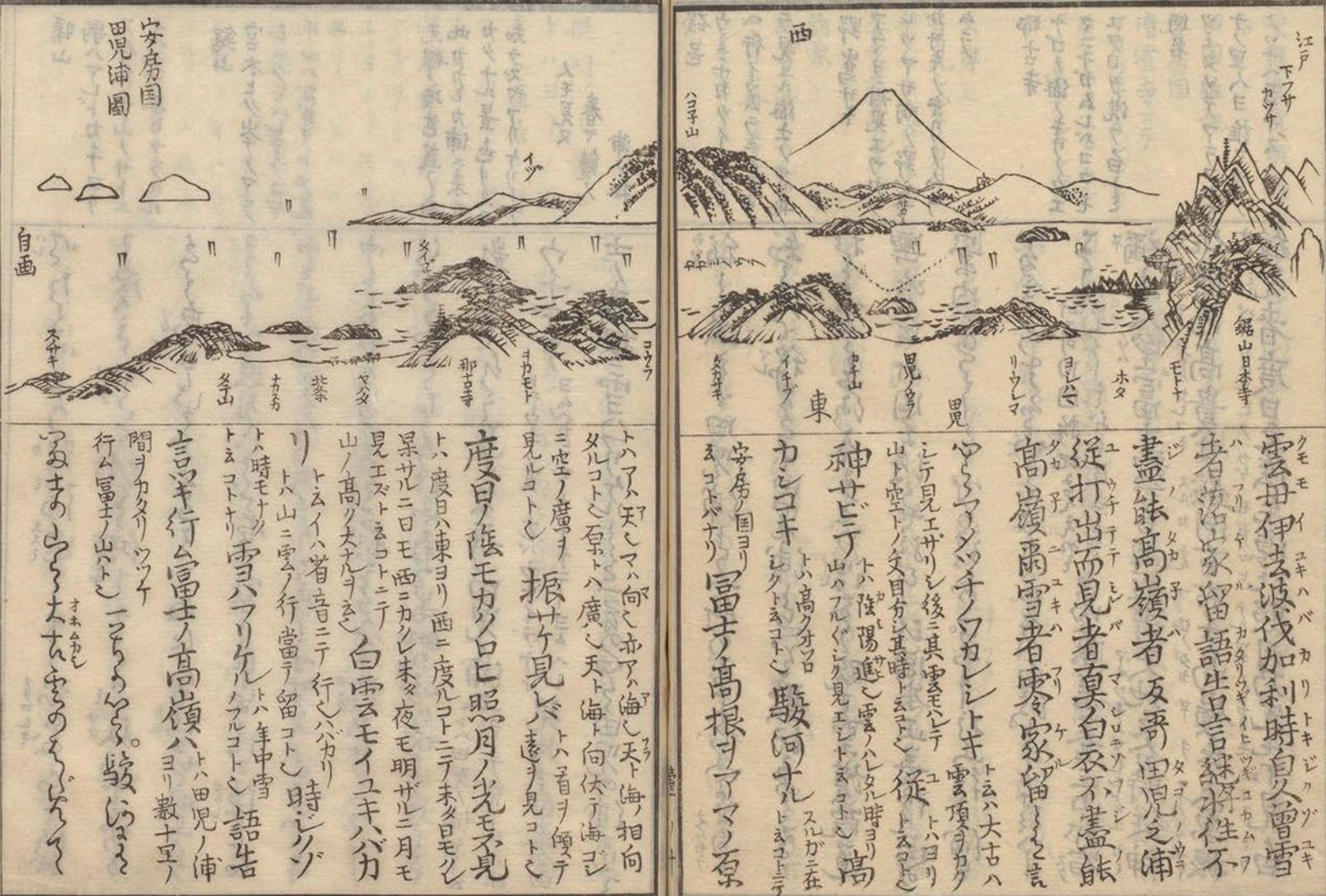
放見者度日足陰毛隱比照月乃先生不見白

阿名

ツミタメテアラフカヘ

ナノ里人ヨ推アツモフ

ノソナヘニヤナス



勝山

卷之三

卷之三

黒ハアレトカキヨリ
ソ行カ千山ノサトニ
コハタク思ヒヤラルル

鋸山 宮本ヒリ岑ノアラ
ニクモハレテニコギ
リ山ハガガリトゾ見

元禄ノ頃芭蕉ノ句
此カカミカ浦ニ未テ
カクナル景色ナムモ
知ラズヤアリケリトテ

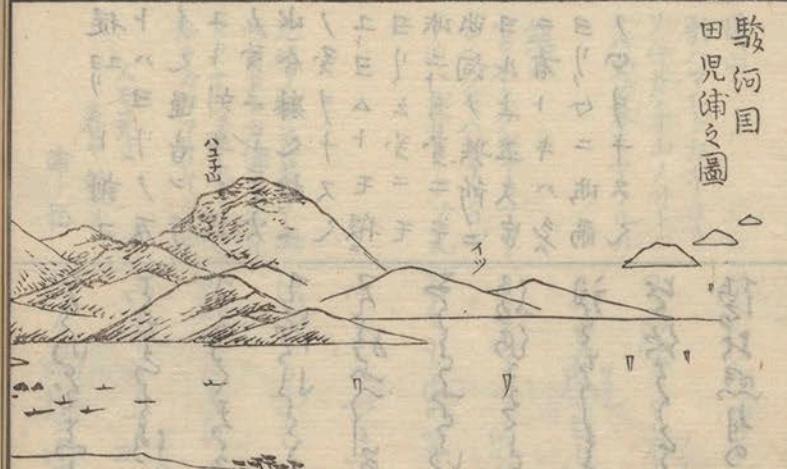
人モ見又
春ヤ鏡ノ
蒲ノ梅

駿河国
田尻浦景圖

山^{カケ}は^{ヤカヒ}

山^{カケ}は^{ヨレラ}

山^{カケ}は^{ヨレラ}



西

山^{カケ}

サヌキ山

あまくわづらと能むけたり

あまくわづらの田尻の浦

あまくわづらの山^{カケ}と遠会わんあまくわづらを求く

けんあまくわづらの駿河のあまくわづらを求く

もごく遠人かのれに顎をひくとも

あまくわづらの書つてみゆきの後世の後よけあまくわづ

らのあまくわづらの葉をくまむいと

あまくわづら能むけたりのあまくわづら

あまくわづら安房をうしませんかざるや

はまけたもの中よけたるのあまくわづら

富士山八東方表

西裏

山緋ヨリ小原コハラ。

ヨレ
ヨリ

御身をうつすの浦をまよひておもひにまわる人すぢ

アラタキの中の苗を植え、傳へあらわす能

ノシテ
白布の二種類

卷之三

おまえのやうな事はあつたるが、白痴の三痴、あつて、

アラモア

卷之三

姓氏不詳

紅葉ト云本語
モニタシニダ
シノ反ニエシ
テモニヂト云
陽氣強中ニ入
テ赤色ヲモニ
出スノ至ニ故
ニモニツトモ
云々
古今ニ
シクリツウモ
ニヅルヨリモ
ナドアリ

すくよしめじふわらひせん
あやめとくわくわくかよ
古今集秋 是貞観の山の寺会の歌謡
人不知る奥山と雨の辺と一首のみを寧
の格と曰う。浦爾と曰。モミ子のそばにい
経も古の事あらむ一首のやう。秋の邊とあ
かねてのをとす奥山と山のとくらのあたる
きぬあらう。秋のあをやくはくわくはくはく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
奥山の事のそばにい

アサリ
本語アシサル
ニシヨ省テア
サル云食ヨボ
時ハ必足ニテ
土ヲ力キテ足
ヨ去モ人也故
ニ食ヨボノ字
ナ以テ穿訓ス
鶏ハ求食スル
時必声アリ妻
コフトキハ殊
サラレシ
駄ノアレ去
必声ナス雞
ノアレ去時
必食チホ
ナトハ

ボ食
アサリ
ニシヨ省テア
サル云食ヨボ
時ハ必足ニテ
土ヲ力キテ足
ヨ去モ人也故
ニ食ヨボノ字
ナ以テ穿訓ス
鶏ハ求食スル
時必声アリ妻
コフトキハ殊
サラレシ
駄ノアレ去
必声ナス雞
ノアレ去時
必食チホ
ナトハ

アサリ
本語アシサル
ニシヨ省テア
サル云食ヨボ
時ハ必足ニテ
土ヲ力キテ足
ヨ去モ人也故
ニ食ヨボノ字
ナ以テ穿訓ス
鶏ハ求食スル
時必声アリ妻
コフトキハ殊
サラレシ
駄ノアレ去
必声ナス雞
ノアレ去時
必食チホ
ナトハ

キノ時ソ秋ハカナニキト譲ベモ謂フ奥山也。其の
辯のうよあつたるを自らも己が奥山より御と
アラバ
ナシキ
アラバ
ナシキ
スイリヤウ
スイリヤウ

大納言 徒三位
旅人男
徒三位 大伴宿
称家持

中納言家持

カモヘギアマセタヒニホモの
カモヘギアマセタヒニホモ

新古今集卷一
題

霜ト云本語ハ
シハ昇水くモ
ハ船く水氣地
上昇テ天ノ火
徳ニ和レテ凝
ノ名ニ申モ
ノ及ツシソハ
露霜ト云時ハ
玉ナルヲヌ

鳥部の
階ノ事高處の階のとあり
シハ昇水くモ
ハ船く水氣地
上昇テ天ノ火
徳ニ和レテ凝
ノ名ニ申モ
ノ及ツシソハ
露霜ト云時ハ
玉ナルヲヌ

家ト云語ノ本
ヤハ屋ニカハ家ニ
真莫ニヨリテ
一字ヲヤカト訓
シホヤグラノ
ラバカシテヤ
ハ擧ハ別屋
ニ累タルノ
名家ニ
モ天也
御盛ノ伯也

擧水ノ本語ハサ
ニシテカハ暉太
ニシテ水也盛
ノ伯ノ故ニ春
火也氣ハ盛十
時ニ花咲其サ
力ノ伯
サカル盛
サカユ采
サカキ坂
サカキ酒宴
サカキ押
サカ木押
如是皆陽氣進
今紫霞殿ノ梅
ノ伯ノ
モ天地ノ自然

之也亦大古也其屋敷と云文字多也之の
根也アサキの反シありホサキの反シテ
ニシテ此の二音ニヨコ木合丈等と借て紫霞
殿と呼んで之なる其例本年良の宮也名寧樂宮
と云字を借たるヤイのイニニ浪川の省ニラノの
省も省立日弓弓平ラムミナラヒトニナラト
男心なり又モ室寶御宮の文字を借たる
日延也知後ヨ大人等とも大字文字を扱うる
シノ後セラニ書をのぞく同様して書かれて
カササキ

ト云語ノ本
ヤハ屋ニカハ家ニ
真莫ニヨリテ
一字ヲヤカト訓
シホヤグラノ
ラバカシテヤ
ハ擧ハ別屋
ニ累タルノ
名家ニ
モ天也
御盛ノ伯也

ト云語暉幸幸也云あるも約モカサキト云
モハレニ發モ文字也之の暉幸幸の發
ト云て之も之の暉幸發也久アリ也
皆鳥群の子母子も信也又トモ大王も日の三神の
彦ニモシモサキ也久アリ也之の暉幸也
ロウモシモサキ也久アリ也之の暉幸也
陵のニシテ水也寧伯あり信也火也幸也在也
火幸幸也云水也幸也ニシテ陵也火也幸也
名也モモモモサカシニサカサキササキ
カササキ

七夕をもむかしの夜のとやかゆゑを
はるかをもとて朝廷と云朝臣と云内日刺官
と云古昔よりは梅もと赤の色をも
ちつて宮中と日のコトをもへて緋の色を用
を掲よ捨ばと用ひて既又日はすとがのとく
用ひぬとて唱ふる日は雪もとよを吟の
ふあむに白きとく水物傳う

安部仲麻呂

新撰姓氏錄ニ
孝光天皇ノ太子大度命ノ後也又祖不詳
真人縣守等遣

あらわすとくわくとけんじをまわる
このとくのやうに生むる

唐使ノ時共ニ
唐ニワタリシ
人也

古今集図書

李白周灵龜二年ハ唐の開元四年もとを歸

唐李白詩
日本卿晁辭帝
都征帆一丸繞
蓬臺明月不歸
沈碧海白雲秋
露滿蒼梧一在
日本ニ不歸
テ海中ニ死タ
ルニヤ

かくも在唐ノ皇朝帰らむと明かよつて津
入唐ノまゝ唐ノ上元元年迄凡四十五年を
アマノ原ノアマノ天向海向ノ王ノ海
向体ノをとふ廣ノアリフリサクモロヒテ
振き放し春日ナルニテルの約ノ白玉朝
大和國春日ノカスカ
布ミムニテ放本ノ歌を起たる詞レーチのひの明

御の津をもてて天を海と向けて廣い山ありぬや
ヤヌ
さうぞ傾くもく橋ひそつるをもく日昇る力もぐく
ふも春よりことの山すら生れしを既仰本と終と會
たるくにカモトとふ辯ひせらるの肝要ちうきま
えもて沈昇月を亞モて西モ我日本も日の三笠山
の方角へねりと他處を疑ひたるに自らゆの
とねまひやらうとんむりみてアソウ

喜撰法師

姓氏不詳弘仁
一頃一人也

長明毎明抄云
御室アノ奥ニ
木町バカリ山
中へ入テ喜撰
カ往ケル跡有
家ハ十ケレト
石塔ナドサダ
エタリアリト
見ダ

古今集解題
ニカバスムとく廉^{シカ}に従^{スム}然^{レハ}に従^{スム}トウ内^{スツ}
ナム内^{スツ}ヨリ^{シカ}ヨリ^{スム}與^{シカ}支婦^{スム}與^{シカ}君^{スム}
ヒト與^{シカ}世^スを達^シヒト與^{シカ}世^スを達^シ世^ス於^シヒト與^{シカ}人^ス
世^ス中^スヒト^{カシ}暖^シ往^キ至^リ陰陽^{アマツ}の與^{シカ}合^ス世^ス
ヒト^{カシ}與^{シカ}世^スを夏^{ウキ}ヒト^{カシ}與^{シカ}世^スを冬^{ウキ}ヒトハイアリ
ヒト^{カシ}與^{シカ}世^スを夏^{ウキ}ヒト^{カシ}與^{シカ}世^スを冬^{ウキ}ヒトハイアリ
ヒト^{カシ}與^{シカ}世^スを夏^{ウキ}ヒト^{カシ}與^{シカ}世^スを冬^{ウキ}ヒトハイアリ
ヒト^{カシ}與^{シカ}世^スを夏^{ウキ}ヒト^{カシ}與^{シカ}世^スを冬^{ウキ}ヒトハイアリ
ヒト^{カシ}與^{シカ}世^スを夏^{ウキ}ヒト^{カシ}與^{シカ}世^スを冬^{ウキ}ヒトハイアリ

姓氏不詳
アリトイヘ共
不取死ハ八十
島ニ在ナトハ
物語ノ説ニテ
用ヒ力タシテ

花ト云語ノ卉
ハトハ放也ナ
タルく草木ノ
氣ノ故ト云語

せを夏ヌモアヤマツツジルコトハシテ
シカレドミマフアの興モモリイ候アキレモ妻シ
花のあらわをこゝせを夏ヌモアヤマツツジルコト
トリムシ候モリハシテモテアシモ候モシテ候
トモアリテ花モ佐々木夏ヌモアヤマツツジルコト
トモアリテ花モ佐々木夏ヌモアヤマツツジルコト
トモアリテ花モ佐々木夏ヌモアヤマツツジルコト
モモ下よ人ハイナリトヨモトノ内ノ内ハシテ
イフナリ然モト知モイモ興モモリイ候アキレモ
花モシテモアヤマツツジルコトハシテ

二人ノ言ニ同色ト云ハ氣之口ハ場ニ人ノ五音ノ分同故ニ五色ニ分其慕王五色人間五十連畜以テ自在ニ詫草木五色花以テ自在ニ花咲草木モノハズトイヘ共五ノ數ナ以ス花ハ人間言ガ如也

姓氏不詳
今昔物語ニ博

蟬丸

一
二十一

雅三位ト云入本バタノ盲人ニ瑟琶ヲ習シコト在ト云其人ナルベシト云モ不取
生や死モカモカノルわらひとる
死ゆる事本
後悔仕事
相好の言ふたまことひ室をひけ
コレヤコトメ初めをうながすは下の室とち室もいろま
ヨアリビト是ヤ此室とひてヒヤの詩とは是
よき詩とひよき詩の間ニ文をもと下の詞を考究
キテ新古詩詩はやか(考)白雪や花(考)後拾
意ちく同様詩はやか(考)あら(考)す

アレ
本海ア
士マ
ト云
ア海
語
ノ通
シテ
郎ニ
故カ
男
ヲ女
郎ト
云ニ
男
女
海
ニ葉
スル
人
ハ是
ニ同
ス

アレ
本海ア
士マ
ト云
ア海
語
ノ通
シテ
郎ニ
故カ
男
ヲ女
郎ト
云ニ
男
女
海
ニ葉
スル
人
ハ是
ニ同
ス

アレ
本海ア
士マ
ト云
ア海
語
ノ通
シテ
郎ニ
故カ
男
ヲ女
郎ト
云ニ
男
女
海
ニ葉
スル
人
ハ是
ニ同
ス

アレ
本海ア
士マ
ト云
ア海
語
ノ通
シテ
郎ニ
故カ
男
ヲ女
郎ト
云ニ
男
女
海
ニ葉
スル
人
ハ是
ニ同
ス

安世朝臣ノ男
也俗名良岑朝臣
宗貞之任左近
衛權少將帝崩
于後出家_{姓号}
花山僧正又号
良僧正

道力_{スル}あらゆるといふのをうながす

僧正遍昭

たはれをかまひらむとく
ちくわんめすぐ、とぞくともくわむ
古今集新　五節の歌_{タマシ}をよぐる
とくはるの舞_{タマシ}の始_{タマシ}續日本紀より天平十五年五月
群臣_{ジンシ}をすす宴_{ミシ}すくと五節の唱_{トナハ}五月の節のち
五節とて_{タマシ}の節_{タマシ}りす自_{オラヤフ}する
アキ後_シ十一月新_{ミツ}嘗_{ミツ}祭_{タマシ}の時_{タマシ}の間_{タマシ}
あすみをねぢうんじうるをあすアマツ風_{タマシ}

天_{タマシ}ノ見_{タマシ}吹トギヨミヨミアキ_{タマシ}一首の歌_{タマシ}夫_{タマシ}
さあやくいひをうけに用_{タマシ}よけをうけとく_{タマシ}のくわくとく
まくはくすくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

太御文清和天
皇也

陽成院

はくとくのくもくとくとくとくとくとく

鉢波ト云本語
ハツク附ニバ
兩ノユトニ
兩山ト云コ
トニ男山女山
ノ兩其山ノ形



あつごつとてくまうとう取りぬき

後撰集本惠

の處の處にさうすま

けむ鉢波の山をやまと見え天皇第二の白山也
はての鉢波もあた傳北あ圓山は在るを仰せ
あけ鉢波も約する處をもとよろとす

陽成の天け白山女と赤毛山と傳ひもとす
えま山帝ハシム山中陸のをまちをさし陸ある
鉢波らもとを傳へりてあけ山女山のひ双峰と
えもとを傳へりてあけ山女山のひ双峰と
えもとを傳へりてあけ山女山のひ双峰と

男山の山をもとせりとす。女山の山の
双峰流波山の山をもとせり水の山をもとせり
をもとせり山をもとせり水の山をもとせり

兩ノ鉢波山
トハ女男ノ山
ヲタツ附ニキ
し此山ノ正中
ヲ流ル水三ナ
ノ河ト云

水流河

男山の山をもとせりとす。女山の山の
双峰流波山の山をもとせり水の山をもとせり
をもとせり山をもとせり水の山をもとせり
をもとせり山をもとせり水の山をもとせり
波モ寺宇呂尔ホ都流美豆代爾牛多由浪尔
和我於毛波大永久爾牛多由浪尔
といを細き流スアゲモダム不うちては寺宇呂
波アリテアサヒ切クムカタカタアセラム
水の山の山をもとせりとす。女山の山の山をも

源朝臣融公也
嵯峨天皇第八
ノ子大原氏ノ
所産ニ天皇ニ
賜テ今爲子

河原ハ生土ノ
名ニ氏ニ此原

ト訓時ハ廣原
ノ名ニ叶ニワツ
ラト云時ヘ生

トニアラトニコ
ズリコトニコ

河原在ワラ

清ワラ

菅ワラ

藤ワラ

田ワラ

梶ワラ

是等ハワラト

唱テハラト云

斯廣キ原ノコ
トニアラサレ

バニ廣キ原ノ
コトナレバ

海原天原

ムサシノ乃草

タキノ草

其外ハラト云テ
ワラト云ス亦

偶地名ワラテ
アリ共必

河原左大臣

おもひのくよみをまどひてくわゆふに
かくじゆくとくくふそくうかくす
なき出あ志 題とひとくでなきすらも
れよあせ 挑とひとくをなきすらも
ねよあせとこしテモゼスリとす芳陸奥忍取
ト訓時ハ廣原 ノ名ニ叶ニワツラト云時ヘ生
トニアラトニコズリコトニコ

あるの出あと雨の音とトの匂いと雨の緋と
あるの出あと雨の緋と木の匂ふ
あるの出あと雨の緋と木の匂ふ
あるの出あと耳立章アサルニゲレソメニシ我ナラギリ
雨誰故アホナシテト裏表も淺拾シテモハ
えらぐの事ハカタマツ理の事ハカタマツ
れより我より多くに汗を流す事ハカタマツ
とかく汗をあくよとぬるの事ハカタマツ
みそソシニシカタマツの事ハカタマツ
人けをもだすおのう事ハカタマツ
りつらういふ事ハカタマツ

古今集解別

題もくじ

今ト云語ノ本
ハ息間イマツカ出息
ト入息ノ間ト
云コトニ依テ
早ヲ指テ云詞
之例シヨウト云語
ハ息續イマツカタ之息ノ
連コトニ行遠
ヲ指語之何日
ノ代或ハ今シ
ト云ニ同シ

鴨河ト
本ハ鴨モロ河也
委ハ三ノ巻ノ
能因ノ哥モロノ處
ニ在此河ノ名
ニ乃ノ辞ナ加茂
ノ上ニ加茂ト加茂
ノ地名在テ支
ヨリ續スルテ加茂
乃河ト云淀川
云地名トモ云
淀乃川支ニ淀
云地名トモ云
辭ナ加茂云
法則アリ猥モロニ
ハ言

是モ同是モ乃の辯をかくらひて云ふを
ユラツク夜か爲乃のと夕月のとぞとぞとぞ。亦荒山
ミ乃の辯をかくらひて云ふ。大るや。おちたるとして太小
ヨレ去をうそもうそもうそもうそも。大は夕年
ヨレ去をうそもうそもうそもうそも。大は夕年
波乃浦。是乃浦。是葉類モロ猥モロ辯を首モロに
少念ひ小をゆく事の名也。大は辯モロ辯
かつ名也。是叶類モロ辯を首モロに
かくらひて云ふ。是叶類モロ辯を首モロに

今ト云語ノ本
ハ息間イマツカ出息
ト入息ノ間ト
云コトニ依テ
早ヲ指テ云詞
之例シヨウト云語
ハ息續イマツカタ之息ノ
連コトニ行遠
ヲ指語之何日
ノ代或ハ今シ
ト云ニ同シ

イ太山イタツカ周幡國の山モロカ志モロを云カサガ本
村を行スルはしこれトシモロト辯モロく行スル祠
モモロ助言モロ今力アリコムモロ早モロ急モロよ
モモロあつモロ一首の歌モロ立別モロ周幡の同モロ志モロ其山の
山モロ生スルねモロすモロ多モロ行スルすモロ山モロが
えモロもモロくモロいモロ行スルすモロ山モロを
乃の辯モロかくらひて云カサガ見モロとモロ皇モロ國モロの地モロを
所モロのモロ小モロ金モロ山モロ猥モロ金モロ乃モロ山モロ乃モロの辯
モモロかくらひて云カサガとモロはモロ行スルすモロ山モロを

阿保親王第五
卿子二從四
位上右近衛權
將弟美濃守

在二京業平朝臣

あすかに挾むてかばひ田ひ
かくはまよ年よもくもれと
さかは秋ニ奈の伝のあせの道と
みるは江原風ふ山川ふ山あまかく
と歌を漢語をけはまうけはよ
千早振櫻詞カランナヰカモハ揭紅とて

半早振ハ水穂
傳ニ在

濃のじく漢よもてぬかよとくあくは
かくはまよもあ一あみ櫻てゐる漢て
冬ニツクルトヒリル縊てきつトハシキハ
ト云ハシキホ箇よハ緒そぞき上り詞よ反換
トスハ神代ニモキカズトモカニヨモトモモカズ
魂代モホクの代モトモアヌム緒シハ百ウタ
え田川よ濃のじく水よ邊くらすモハ振
ミホクの代モナシヒシムラシムラサカランナヰ
とがくはてあるもといひみどりう竹をも田とみたる

又ハ按察使富士麻呂也從六位上左兵衛佐ヨリ右近卫少將ニナル

佐吉ヲ住ノ工ト云ハヨシ反イナルヲ通音シテ住ノ工ト云

牛車駄ヘ本車

夢ト云本語ハイソ也イバ氣ノメ向シ氣根ノ内ヲ向シ夢ト云之故ニ寐入ト云モ氣ノ根覺テハコトシ目ニ物見耳ニ音ヲ聞テ氣外ニ現レニハテ回也

ノミナ画フトテ書カ勿傷のと積墨の中ミ
モトシテ氣根ノ内ヲ向シ夢ト云之故ニ寐入ト云モ氣ノ根覺テハコトシ目ニ物見耳ニ音ヲ聞テ氣外ニ現レニハテ回也

ノミナ画フトテ書カ勿傷のと積墨の中ミ
モトシテ氣根ノ内ヲ向シ夢ト云之故ニ寐入ト云モ氣ノ根覺テハコトシ目ニ物見耳ニ音ヲ聞テ氣外ニ現レニハテ回也

父ハ伊勢守繼
舊也

十二ハトハ波
柔ノ爰ニテ波
人平ナルト云
名之故ニ波立
コト難ノ文字
ヲ借し諸國ノ字

船コレ力爲ニ
集ニ鳥ノ海ト
云王柔ノ海ト
湖水ハ浪不立
平ノ庭ト云王
柔ニシテ平ナ
ヨリ云名ヘ

都日羅王ト生
天皇ニ參モ
天皇ニ參モ
息子
大歴天皇

フニ乃シム乃シム加シムコトヨヒ此宵のともかう
ヨトヤのヨミミ支婦のゆつ興のともヤミ友舞ヨヤ
支婦ヨヤ支婦ヨヤシメシム内接シ難波^{カタマ}短
アシケシ乃間ノ序モモたるシ一首りや。経緯リ
海のまよまよと昔の節の間のまよ経緯雪一歌
モモあらひて居てまよ帝と支婦ヨヤシモ
ヨモテモテモテ支婦ヨヤシモテ一夜モモのま
ヨモテモテモテ支婦ヨヤシモテ中ヨリ舞アシム女帝ヨ舞モ能
讀ルヨモテ奇モテはお歌ノヨモテ中モ過ミト
ヨモテハリモテ既モテナシモ流スセイモセアシム

ちううわさもむかう経世ノ道ニ女帝の心モモ
絵を筆と毛筆を書スセイモセアシム
ヨモテモテ支婦ヨヤシモテ中ヨリ舞アシム女帝の心モモ
けあう心のむちう心モテ夜會の高モアシム女帝
シテノアシムモテと傳ナリモテ

伊勢守

以詩はがく旅はあめのゆハ
あもとぞよめやゆきとよもと
新古を集憲
歌を歌とて

難波深津用^{ヨヒ}難波の海をちまちま

中まわづすやくのすやヨの申すもいりすけ興の
中のとまう

又ハ陽成天皇

也京極ノ御息所
ト申ハ時平公
ノ女震子也宇
多天皇ニ參テ
雅明親王ヲ生

和備トハ吾ヲ恨
コトハ恨和備ハ
人ヲ恨吾ヲ恨ム
コトハ恨

元良親王
コトハめのんとて御身破る
タシテ
タモつてもまもどりまふ
後摺集惠 事しては京極の御息所に
モハヤモモとえ良親王を京極の御息所に
ひそかに狩りてあわせよ諱でモ
タモアリワビト我を恨ムウタキ自歎ミツガフ
老をもあらハタと云ハシフタの友バナリタモキ

深標トハ水終尽
印ト云コトニテ
真冰ノ海ニ流ノ
終ハ中深テ左有
浅モノニ漕乗ル
舟ニ使ト深ヲ知
スル印ニ建ル柱
ヲ云ニ故ニ窓ニ
身ヲツクスコトニ云
思ノ故キ深ニカケ
テ云ニ此哥己ニ
レカ

ヨリ左の手を合ひまほむぬうちもす俗をば
よみてより十二八十九と云ひ波音とて
クニテモアを盡トモ漂標ヒラツキよけたる二首のみ
我の道を考へをもをあまかくあらんとね
えをばらせがくもあもとあらをばくもと
よも漂標のやまはるをうらまつて令のあら
ばくもとせじとくもと

父ハ良岑朝臣
宗良也

素性法師

今こもくいひをかまにせりの
よもとせじとくもと

144382½

